慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「会計士史」の展開 : 会計学の基本問題(6)
Sub Title	The development of "the history of accountancy profession"
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2015
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.58, No.4 (2015. 10) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	会計プロフェッション史の歴史的サーベイを中心に会計プロフェッション論を考察する。
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20151000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第58巻第4号
2015年10月

2015年7月1日掲載承認

「会計士史」の展開

――会計学の基本問題（6）――

友　岡　　賛

＜要　　約＞
会計プロフェッション史の歴史的サーベイを中心に会計プロフェッション論を考察する。

＜キーワード＞
会計プロフェッション史，会計プロフェッション論，社会学，社会的地位の向上，存在意義，プロフェッション論

（個人的なことながら）まずは「会計史」と「会計プロフェッション論」をもって専門とする筆者にとって「会計士史」はこれをいわば専門中の専門として捉えることもできようが，別稿[1)]にて既述のように，会計史に限ることなく，歴史には「歴史を学ぶ」と「歴史に学ぶ」があり，そのため，歴史を扱う際には葛藤めいたものが生じ，これは「会計士史」と「会計プロフェッション論」の関係においても同様かもしれない。すなわち，プロフェッションを論ずるために歴史に学ぼうとしているのか，あるいはプロフェッション論を踏まえて歴史を学ぼうとしているのか，ということである。

葛藤めいたものがあるということは，いずれとも判然としない，ということを意味し，したがって，「「会計士史」の展開」と題する本稿は，しかしながら，会計士史史（会計士史の歴史）ばかりか，会計士論史（会計士論の展開）をも扱うことになるかもしれない。

会計士論にかかわる文献

会計士論にかかわる文献は多岐にわたるが，ここでは差し当たり書籍に限定し，下記のように整理・分類の上，サーベイすることとする。

＜引用について＞
原文における太文字表記や圏点やルビの類いはこれを省略した。したがって，引用文におけるこの類いのものはすべて筆者（友岡）による。

1）　友岡賛「会計通史の展開」『三田商学研究』第58巻第3号，2015年。

なお，個々の会計士団体や会計事務所の歴史を扱ったもの[2)]は本稿の対象から除かれている。

プロフェッション論（社会学の文献）

A. M. Carr-Saunders and P. A. Wilson, *The Professions*, 1933

Geoffrey Millerson, *The Qualifying Associations: A Study in Professionalization*, 1964

Philip Elliott, *The Sociology of the Professions*, 1972

Terence J. Johnson, *Professions and Power*, 1972

Magali Sarfatti Larson, *The Rise of Professionalism: A Sociological Analysis*, 1977

Andrew Abbott, *The System of Professions: An Essay on the Division of Expert Labor*, 1988

Robin Roslender, *Sociological Perspectives on Modern Accountancy*, 1992（ロビン・ロスレンダー／加藤吉則，杉原周樹（訳）『会計と社会――現代会計制度に関する社会学的諸観点からの考察』1995年）

Keith M. Macdonald, *The Sociology of the Professions*, 1995

会計プロフェッション論

John W. Buckley and Marlene H. Buckley, *The Accounting Profession*, 1974

Robin Roslender, *Sociological Perspectives on Modern Accountancy*, 1992（ロビン・ロスレンダー／加藤吉則，杉原周樹（訳）『会計と社会――現代会計制度に関する社会学的諸観点からの考察』1995年）

Mary Beth Armstrong, *Ethics and Professionalism for CPAs*, 1993

Kenneth S. Most, *The Future of the Accounting Profession: A Global Perspective*, 1993

R. W. Perks, *Accounting and Society*, 1993

Gerard Hanlon, *The Commercialisation of Accountancy: Flexible Accumulation and the Transformation of the Service Class*, 1994

---

2)　例えば以下のような文献。

団体

Institute of Chartered Accountants of Scotland, *A History of the Chartered Accountants of Scotland: From the Earliest Times to 1954*, 1954

Harold Howitt, *The History of the Institute of Chartered Accountants in England and Wales 1880–1965 and of Its Founder Accountancy Bodies 1870–1880: The Growth of a Profession and Its Influence on Legislation and Public Affairs*, 1966

Cyril W. Banyard, *The Institute of Cost and Management Accountants: A History*, 1985（C. W. バンヤード／鈴木一道（訳）『イギリス管理会計士勅許協会の発展』1989年）

事務所

Edgar Jones, *Accountancy and the British Economy 1840–1980: The Evolution of Ernst & Whinney*, 1981

David Grayson Allen and Kathleen McDermott, *Accounting for Success: A History of Price Waterhouse in America 1890–1990*, 1993

Edgar Jones, *True and Fair: A History of Price Waterhouse*, 1995

なお，この手の文献については例えば次のものなどを参照のこと。

Wendy Habgood (ed.), *Chartered Accountants in England and Wales: A Guide to Historical Records*, 1994

Brian P. West, *Professionalism and Accounting Rules*, 2003

会計プロフェッション史

James McClelland, *The Origin and Present Organization of the Profession of Chartered Accountants in Scotland*, 1869

Beresford Worthington, *Professional Accountants: An Historical Sketch*, 1895

Richard Brown (ed.), *A History of Accounting and Accountants*, 1905

Arthur H. Woolf, *A Short History of Accountants and Accountancy*, 1912（ウルフ／片岡義雄，片岡泰彦（訳）『ウルフ会計史』1977年）

Wilmer L. Green, *History and Survey of Accountancy*, 1930

Nicholas A. H. Stacey, *English Accountancy 1800–1954: A Study in Social and Economic History*, 1954

James Don Edwards, *History of Public Accounting in the United States*, 1960

H. W. Robinson, *A History of Accountants in Ireland*, 1964

John L. Carey, *The Rise of the Accounting Profession: From Technician to Professional, 1896–1936*, 1969

John L. Carey, *The Rise of the Accounting Profession: To Responsibility and Authority, 1937–1969*, 1970

Jas. C. Stewart, *Pioneers of a Profession: Chartered Accountants to 1879*, 1977

R. H. Parker, *The Development of the Accountancy Profession in Britain to the Early Twentieth Century*, 1986（R. H. パーカー／友岡賛，小林麻衣子（訳）『会計士の歴史』2006年）

Moyra J. M. Kedslie, *Firm Foundations: The Development of Professional Accounting in Scotland*, 1990

Paul J. Miranti, Jr., *Accountancy Comes of Age: The Development of an American Profession, 1886–1940*, 1990

Derek Matthews, Malcolm Anderson, and John Richard Edwards, *The Priesthood of Industry: The Rise of the Professional Accountant in British Management*, 1998

Ken Shackleton and Stephen P. Walker, *Professional Reconstruction: The Co-Ordination of the Accountancy Bodies 1930–1957*, 1998

Derek Matthews and Jim Pirie, *The Auditors Talk: An Oral History of a Profession from the 1920s to the Present Day*, 2001

Mike Brewster, *Unaccountable: How the Accounting Profession Forfeited a Public Trust*, 2003（マイク・ブルースター／友岡賛（監訳），山内あゆ子（訳）『会計破綻――会計プロフェッションの背信』2004年）

T. A. Lee, *Seekers of Truth: The Scottish Founders of Modern Public Accountancy*, 2006

T. A. Lee, *The Development of American Public Accountancy Profession: Scottish Chartered*

Accountants and the Early American Public Accountancy Profession, 2006

Derek Matthews, *A History of Auditing: The Changing Audit Process in Britain from the Nineteenth Century to the Present Day*, 2006

Paul M. Clikeman, *Called to Account: Fourteen Financial Frauds That Shaped the American Accounting Profession*, 2009

プロフェッション論と会計プロフェッション論

社会学におけるプロフェッション論の文献はA. M. カーサンダース（A. M. Carr-Saunders）とP. A. ウィルソン（P. A. Wilson）が1933年に上梓した *The Professions* を先駆的な古典とし，上掲の数点が代表的なものといえようが，異色の一点は，プロフェッション一般ではなく，会計プロフェッションに対象を限ったロビン・ロスレンダー（Robin Roslender）の1992年刊の *Sociological Perspectives on Modern Accountancy* である。そうしたこの書は，したがって，「会計プロフェッション論」のカテゴリーにも含まれようが，社会学の文献ということから，まずはここで取り上げるに，「本書は社会学における様々な観点を明らかにすると同時に，会計を学ぶ者に理解し易い形でそれら観点を適用した最初の書物である[3]」とされ，また，「それが扱うのは，会計専門職，その業務上の役割と業務事情，そして会計制度のイデオロギー的性格である[4]」とされつつも，「しかしながら，本書は単なる会計制度の社会学（sociology *of* accountancy）ではなく，会計学のための社会学（sociology *for* accountancy）でもある[5]」とされている。すなわち，この書は ‘Part I　The sociology of accountancy’ と ‘Part II　Sociology for accountancy’ の２部からなり，「第１部は，会計関係者にとって関心のある色々なトピックや論点を慣行的なやり方で考える会計制度の社会学を提示しようというよくありそうな企画である。それに対して，第２部はかなり革新的で，会計学のための社会学を提供しようとするものである。そこでの目的は，社会学的発想を使って，会計学の主要分野の中で関心の高い諸々のトピックや論点について洞察するための手段を見つけ出すことである。そうした場では，単に社会学者の視点から会計制度を考察するのではなく，会計学の発展のためにそれらのトピックと論点に対し社会学的発想を適用することになる[6]」としている。

他方，社会学者に非ざるジョン W. バックリー（John W. Buckley）と マーリーン H. バックリー（Marlene H. Buckley）が1974年に上梓した *The Accounting Profession* は冒頭において「会計プロフェッションは，多くの点において，不用意な旅行者にはその地やそこの人々の最もよいところが分からない外国に似ている。前もっての用意は快適で有意義な旅を結果することが少なくない[7]」としているが，その前提には「会計プロフェッションは広く公衆と関係をもつという点にお

3）　ロビン・ロスレンダー／加藤吉則，杉原周樹（訳）『会計と社会――現代会計制度に関する社会学的諸観点からの考察』1995年，iii 頁。

4）　同上，iii 頁。

5）　同上，iii 頁。

6）　同上，13頁。

7）　John W. Buckley and Marlene H. Buckley, *The Accounting Profession*, 1974, p. vii.

いて他の主要なプロフェッションと異なっているが，医師や弁護士の臨床的な形とは違って，会計士の仕事は一般の人々の目からは隠されている。会計の仕事の多くは大規模な組織のなかで，あるいは大規模な組織のためにおこなわれているが，そこにおいてさえも，接点は比較的少数の人々に限られている。例えば会計士は投資意思決定の基礎をなす財務報告にいたるプロセスにおいて極めて重要な役割を果たしているが，それにもかかわらず，直接に投資家の相手をするのはアナリストである[8]」とし，「会計士には（建築家やエンジニアやその他のいくつかのプロフェッションの場合と同様）このプロフェッションに対する人々の態度をより肯定的なものにすべく，人々を教育し，刺激するような形でもって情報を伝えるマスメディアがない。会計士にはドクター・キルディア（Dr. Kildare）もアイアンサイド（Ironside）も，アーチ・バンカー（Archie Bunker）[9]さえもいない[10]」とするような認識があり，そうした本書は会計および会計プロフェッションの概史から説き起こし，現況，会計教育および試験制度，このプロフェッションにかかわる諸規制，ならびに今後の展望等について体系的に述べている。

ブライアン P. ウエスト（Brian P. West）の2003年刊の *Professionalism and Accounting Rules* は「会計プロフェッションについては，会計情報が経済事象を適切に示して財務的な意思決定にとって信頼しうる指針となることよりも，ルールにしたがうことばかりが強調されており，すなわち会計士業の質についてレベルの低い不十分な考え方が蔓延していると主張し，また，会計研究者が財務諸表の技術的な質の向上には極めて無関心であること，および，会計教育がルールブックに精通させることばかりに重きを置いていることを明らかにしている。……本書は，会計の機能，プロフェッションの特質，役割，および責任，ならびに会計ルールの特徴および作用を考察した結果，会計士がプロフェッショナルたりうるためには，プロフェッショナルに求められる認識論的権威に支えられなければならない，という結論にいたっている[11]」とされている。すなわち，「本書の研究は，会計プロフェッションは，ルールを用いて作成された財務情報が役に立つかどうかよりも，ルールを設けることとルールにしたがうことに心を奪われてきており，それに没頭し続けている，ということを主張し，さらに，プロフェッションというものを特徴づける認識論的権威の追求において，すなわち，プロフェッショナルな業務の礎となるような明白に信頼しうる知識を身に着けることにおいて，こうしたルールへの没頭が妨げになっている，ということを主張して[12]」おり，そうした「本書の研究の第一の目的は，現在の会計ルールは役に立つ財務情報をもたらしていない，ということと，このルールの解釈と適用にかかわる専門的技倆はプロフェッショナルに求められるような認識論的権威に繋がるものではない，ということを示すことにあり，この研究の根底には，会計情報の質は，定められたルールへの準拠度によってではなく，経済事象との一致度によって決まる，という考えがある。したがって，会計ルールの設定は自ずと機能的なものと考えることはできず，それが財務上，より有用にして正確な手段をもたら

8）*Ibid*., p. vii.
9）いずれもテレビドラマの登場人物。
10）Buckley and Buckley, *The Accounting Profession*, p. vii.
11）Brian P. West, *Professionalism and Accounting Rules*, 2003, p. i.
12）*Ibid*., p. 7.

しうる場合においてのみ，機能的なものとして捉えられる。また，会計のプロフェッショナルたちの責任は，所期の目的に対する会計情報の機能的な適合性を確保する，ということにあるため，単に特定のルールへの準拠を保証しただけでは彼らの務めが果たされたことにはならない[13]」としている。

会計プロフェッション史史――初期

会計士団体が誕生をみたのは1853年のスコットランド，この年，エディンバラ会計士協会（Society of Accountants in Edinburgh[14]）とグラスゴー会計士・保険数理士協会（Institute of Accountants and Actuaries in Glasgow[15]）が相次いで設立をみるにいたったが，後者の設立を牽引し，その初代の会長職に就いたジェームズ・マックレランド（James McClelland）の1869年の講演録 *The Origin and Present Organization of the Profession of Chartered Accountants in Scotland*（講演の実施は前年）は，けだし，会計プロフェッション史の嚆矢として捉えられようし，また，1815年にグラスゴーにあって最初期の会計士業を代表するジェームズ・カーの事務所にて年季奉公を始め，1824年に独立して自身の事務所を構えたマックレランドが自らの経験を踏まえてスコットランドの勅許会計士の出自を述べたこの講演録はこれ自体が史料といえよう。

会計プロフェッションの成立については，イングランドとの対比において，スコットランドにかなりの先進性をみることができるが，後出の R. H. パーカーの書に「スコットランドは会計士団体の設立においてイングランドに遙かに先んじていた。今日，スコットランド人の血を曳く会計士たちは，このことをもって教育および専門性におけるスコットランドの先進性の明確な証左と看做し，また，事実，一九世紀にあってスコットランドの教育は，イングランドのそれに比して，より広汎にしてより実践的なものであった[16]」とされる状況については，マックレランドの「イングランドの制度は近年にいたるまで，会計士として十分な訓練を受けたひとびとを舞台の前面に立たせることを怠ってきました[17]」との言がよく引かれる。

An Historical Sketch を副題とするベレスフォード・ワーシントン（Beresford Worthington）の1895年の書 *Professional Accountants* はこれも会計プロフェッション史の先駆として捉えることができ，まずは「プロフェッショナル Accountants とは，第一義には，計算書類について豊かな専門知識を有しているか，あるいは有している態度を執る人々のことであり……Accountant の語はラテン語の *computare* に由来するフランス語の *compter* に由来し，元来は Accomptant と書かれていたが，徐々に発音が柔らかくなることによって現在の綴りに変わった[18]」といった概念と用語の確認から始まる。

13） *Ibid.*, p. 8.
14） ただし，設立当初は Institute of Accountants in Edinburgh。
15） ただし，設立当初は Institute of Accountants in Glasgow。
16） R. H. パーカー／友岡賛，小林麻衣子（訳）『会計士の歴史』2006年，36頁。
17） James McClelland, *The Origin and Present Organization of the Profession of Chartered Accountants in Scotland*, 1869, p. 14.
18） Beresford Worthington, *Professional Accountants: An Historical Sketch*, 1895, p. 1.

如上の先駆に続くリチャード・ブラウン（Richard Brown），アーサー H. ウルフ（Arthur H. Woolf），およびウィルマー L. グリーン（Wilmer L. Green）の通史は別稿[19]に譲られるが，以上の「初期の会計史文献には，その多くで会計とそれに携わる専門職業人の社会的地位の向上という役割が期待されていた。会計が，古くから営まれてきた長い歴史を持つものであることを強調することにより，会計専門職業の存在意義，あるいは，学問としての会計学の正統性を示そうとしたのである[20]」ともされ，すなわち，「ウルフの言葉は……まさに勃興期にあった「会計士」と「会計専門職業」の由来を古代社会から歴史的に跡づけ，それらの存在意義を社会に強く訴求することを意図してか……[21]」とされ，あるいはブラウンの書の「「序文」には，スコットランドの会計士団体の法人化50周年を記念して，「ある重要な専門職業に関する十分で信頼に足る歴史」を構成することに努めたとされており[22]」との指摘がなされ，あるいは「ブラウンやウルフの書物と同様な目的を持つと考えられる「会計」の通史的著作は，イギリスに限らず，アメリカでも見出される。たとえば，グリーンの……[23]」ともされている。

会計プロフェッション史史――20世紀後半以降

叙上のように，ブラウンの通史とウルフのそれは別稿に譲られるが，「ブラウンやウルフでは，簿記史と会計士業務の発展史とがいわば併列的に記述された[24]」のに対して「この書物は従来の会計史とは異なり，いわゆる簿記史には一切ふれていない。……著者の努力はもっぱら会計業務の発展を社会的および経済的な諸要因との関連において解明することに向けられているのである[25]」とされるニコラス A. H. ステーシー（Nicholas A. H. Stacey）の1954年刊の *English Accountancy 1800–1954* は当時としては「会計史文献としては珍しいタイプのものだといってよい。対象を英国会計業界の発展過程の分析に限定し，しかも一九〇〇年から現在までを取扱っている。……しかし本書の最も著しい特徴は，やはり著者の問題処理の方法に求めるべきであろう。会計業務の発展を，特に社会経済的背景との関連において取上げるというような試みはまだなされたことがない。それは，従来の会計史家は会計技術の発展ということに力点をおいていたからであろう。或いは本書では簿記史を抜いたからこそ，このように大胆な試みができたのかも知れない[26]」とされる。

ジェームズ・ダン・エドワーズ（James Don Edwards）が1960年に上梓した *History of Public*

19）友岡「会計通史の展開」。
20）清水泰洋「現代会計へのプロローグ」中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』2014年，276頁。
21）中野常男「「会計」の起源とわが国における会計史研究の展開と課題」千葉準一，中野常男（責任編集）『体系現代会計学［第８巻］会計と会計学の歴史』2012年，４頁。
22）同上，４頁。
23）同上，22頁。
24）中村忠「ニコラス・ステイシイ著『英國会計史』Nicholas A. H. Stacey: English Accountancy 1800–1954, A Study in Social and Economic History, pp. xvii ＋295, London, 1954」『一橋論叢』第36巻第１号，1956年，58頁。
25）同上，58頁。
26）同上，64頁。

Accounting in the United States は後出のジョン L. キャリー（アメリカ公認会計士協会（American Institute of Certified Public Accountants）の専務理事）の序文によれば，この先駆的な会計プロフェッションの略史は，略史であるがために，著者が取り上げる事項の選択に大いに苦労したことは想像に難くなく，また，著者は「公にされた記録から距離を置くことなく，彼自身の意見や解釈は最小限に止めている[27]」とされ，他方，当時の書評によれば，「それぞれ1895年，1913年，1928年，1949年，および1950年代の末に終わる５期[28]」の時代区分を設けていることが「不連続な印象を与えている[29]」として批判される一方，「本書には衒いがまったくない。本書はまるで歴史家のメモ帳のようなもので，或る意味，ほとんど未編集のメモ帳のようなものである。……事実の選択と扱い方には著者の判断が必然的に反映されているとはいえ，彼は自分が人々にみせたいと欲する絵を描こうとする芸術家の衝動を抑えている。彼は，或る程度，趣と読みやすさを犠牲にした上で，選択された検証可能な出来事を編年的に記録している[30]」とされ，さらにまた，1978年に会計史古典叢書（Accounting History Classics Series）の一巻としてペーパーバック版が刊行された際，この叢書の編者ゲーリー・ジョン・プレビッツ[31]はこの書評における，選択された検証可能な出来事が編年的に記録された歴史家のメモ帳，という表現を引き合いに出し，「適切な描写であって，エドワーズが選択した方法の含意が理解されている[32]」としている。

ちなみに，この書におけるエドワーズの時代区分は1748～1895年，1896～1913年，1913～1928年，1928～1949年，1950～1959年というもので，次のように説明されている。まず1895年以前の時期は，アメリカの会計プロフェッション史における古代，として捉えられ，1895年にはこのプロフェッションに法的な認知がなかった最後の年という意味があり，次の1896～1913年は，このプロフェッションの法的認知が進捗をみた時期，とされ，1896年にはアメリカ初の公認会計士に関する法がニューヨーク州において制定された年という意味がある。また，第３期は連邦所得税制が設けられた1913年に始まり，恐慌が勃発をみる前年，すなわちアメリカ経済が繁栄を極めていた最後の年である1928年に終わり，1928～1949年の第４期は，このプロフェッションがかねてから追求してきた諸目標を次々と達成した時期，とされ，最後の1950年代は，成年に達したプロフェッションが直面すべき問題のいくつかに直面した時期，とされている[33]。

H. W. ロビンソン（H. W. Robinson）の1964年刊の *A History of Accountants in Ireland* は「アイルランド勅許会計士協会（Institute of Chartered Accountants in Ireland）からの要請により，1963年の同協会の創立75周年を記念して書かれた[34]」が，しかし，この協会の歴史に終始することなく，例

27） James Don Edwards, *History of Public Accounting in the United States*, 1960, p. vii.
28） Edward B. Wilcox, 'James Don Edwards, *History of Public Accounting in the United States* (East Lansing: Bureau of Business and Economic Research, Michigan State University, 1960, pp. xiv, 368, $6.50)，' *The Accounting Review*, Vol. 36, No. 3, 1961, p. 527.
29） *Ibid*., p. 527.
30） *Ibid*., p. 527.
31） 友岡「会計通史の展開」26頁。
32） James Don Edwards, *History of Public Accounting in the United States*, paperback ed., 1978, p. v.
33） *Ibid*., pp. 42, 68–69, 101–103, 148, 199.
34） H. W. Robinson, *A History of Accountants in Ireland*, 1964, p. vii.

えば会計士・監査人協会（Society of Accountants and Auditors）のアイルランド支部であるアイルランド法人会計士協会（Society of Incorporated Accountants in Ireland）の扱いも決して小さくなく，タイトルに偽りはないといえよう。また，1983年には第２版が刊行されているが，初版の対象範囲の1963年までに加え，さらに1981年までを扱いながらも，頁数の増加はこれを避けるため，初版に大幅な改変が施されている[35]。

前出のジョン L. キャリー（John L. Carey）がアメリカ公認会計士協会の元管理担当副会長の肩書きをもって1969年から1970年に掛けて刊行した *The Rise of the Accounting Profession* は「協会の執行委員会が私に本書の執筆を依頼したときには誰もが協会の歴史のことを考えていた。……しかしながら，記録を調べてゆくにつれ，アメリカにおける会計プロフェッションの生成が重要にして魅力的な社会学的現象であったことが次第に明らかになり，それを正当に把握するためには調査の範囲を拡げる必要があるように思われた。その結果，当初の予定よりも長くなり，２巻に分けられることになった[36]」とされ，他方，「本書は不可避的に著者が生涯を過ごしたアメリカ公認会計士協会の見地から書かれており，その結果，各州の公認会計士協会を含むその他の会計関係団体の貢献は小さめに評価されているが，そこには，このプロフェッションの会計実務に影響を与えた全国規模の重要な出来事のすべてについて，この協会は積極的な参加者であったか，あるいは少なくとも綿密な観察者であった，という事情もある[37]」とされている。

スコットランド勅許会計士協会（Institute of Chartered Accountants of Scotland）の元会長ジェームズ C. スチュワート（Jas. C. Stewart）の1977年刊の *Pioneers of a Profession* は「本書は，スコットランド勅許会計士協会のスコットランド会計史委員会の主催者 R. H. パーカー教授による，この委員会は初期のスコットランドの勅許会計士の社会的背景の調査を担うか，あるいは後援すべきである，という提案に由来しており，そうした調査の出発点として関係者のリストを作成することは明らかに必須であり，著者はそれを引き受けた[38]」とされ，エディンバラ会計士協会が勅許を受けた1854年以降の25年間に「勅許会計士」の肩書きを用いた346名について作成された「リストにはエディンバラの協会の会員180名，グラスゴーの協会の会員144名，およびアバディーンの協会の会員22名の名前が収められている[39]」が，このリストは前出のリチャード・ブラウンの1905年刊の *A History of Accounting and Accountants* に収録された計614名（エディンバラ365名，グラスゴー 201名，その他48名）の「スコットランドの物故勅許会計士リスト[40]」とともに有意義に用いられ，また，後出の T. A. リーの書にはブラウンやスチュワートのリストに依拠して作成された計138名の「近代公共会計士業の創始者[41]」をみることができる。

既に何度か言及されている R. H. パーカー（R. H. Parker）は長くエクセター大学の教授職にあっ

35） H. W. Robinson, *A History of Accountants in Ireland*, 2nd ed., 1983, p. vii.
36） John L. Carey, *The Rise of the Accounting Profession: From Technician to Professional, 1896–1936*, 1969, p. xv.
37） *Ibid*., pp. xv–xvi.
38） Jas. C. Stewart, *Pioneers of a Profession: Chartered Accountants to 1879*, 1977, p. xi.
39） *Ibid*., pp. xv–xvi.
40） Richard Brown（ed.）, *A History of Accounting and Accountants*, 1905, pp. 361–400.
41） T. A. Lee, *Seekers of Truth: The Scottish Founders of Modern Public Accountancy*, 2006, pp. 49–360.

て会計プロフェッション史を主な対象とした会計史家であり[42]，その彼が会計史家協会（Academy of Accounting Historians）のモノグラフ・シリーズの第５巻として1986年に上梓した *The Development of the Accountancy Profession in Britain to the Early Twentieth Century* は「すでにして……いわば会計プロフェッション史の古典とされてよく，また，簡にして要を得ていることをもって後続の会計プロフェッション史に頻々と用いられている[43]」とされ，また，*in Britain* と題しながらも，「一九世紀の前半より二〇世紀の前半までのおよそ一〇〇年間を対象とする本書にはしたがって，アメリカにおける会計プロフェッションの発展史と少しく重なる部分がある。……アメリカにおけるこのプロフェッションの発展についてその要因の余りに多くをイギリスの経験に求めることは誇張であろうが，両者の繋がりは明らかである。イギリスの初期の会計士たちは旧世界からの投資に同行し，彼らの伎倆やアイディアを新世界に適応させた[44]」として，他方，「イギリスにおいて発展をみたこのプロフェッションとアメリカにおいて発展をみたそれとの大きな異同は，前者が組織化され，その従事者の資格はこれを民間のプロフェッショナル団体が与えているのにたいし，後者は諸州の制定法によって規制され，いずれのプロフェッショナル団体に属するかにかかわらず，その従事者の資格はこれを州が与えている，という点である[45]」としながらも，そうした両者の「異同は埒外とし，ルーツ，目標，および倫理的制約などといった共通の事柄をもって考察する[46]」としている。

モイラ J. M. ケドスリー（Moyra J. M. Kedslie）の1990年刊の *Firm Foundations* は序文がいきなり「スコットランドにおける会計士業のプロフェッショナリゼーションは1853年のエディンバラに始まり，ただちにグラスゴーに及び，1867年にはアバディーンに及んだ。各協会は各市において開業している会計士にその入会資格を限り，また，即座に会計士志望者に対して公共会計士業に従事する会員の事務所における年季奉公を求めたが，通常，それは高額の謝金を必要とするものであった[47]」との記述に始まるが，「本書は1850年から1900年までのスコットランドの諸協会の発展を論じ，それらの協会によるいくつかの専門的業務における独占的状態の獲得，協同と競争，および無駄に終わった会計士登録制度設定の試みを考察している[48]」と続く。また，「1990年現在，スコットランドにおける唯一の会計士団体はスコットランド勅許会計士協会であり，同協会の会員は1989年にイングランド＆ウェールズ勅許会計士協会（Institute of Chartered Accountants in England and Wales）との合併の提案に反対票を投じてスコットランドの勅許会計士の独自性を守った[49]」として，さらに「著者は，本書が若年の会計士と年配の会計士の両者の興味をそそり，また，後者がスコットランドの会計プロフェッションのメンバーであることにプライドを持つこと

42）　現在はエクセター大学の名誉教授。
43）　パーカー／友岡，小林（訳）『会計士の歴史』４頁。
44）　同上，13～14頁。
45）　同上，14頁。
46）　同上，14頁。
47）　Moyra J. M. Kedslie, *Firm Foundations: The Development of Professional Accounting in Scotland*, 1990, p.xiii.
48）　*Ibid.*, p. xiii.
49）　*Ibid.*, p. xiii.

を助けるものと確信する[50]」という本書は very Scottish である。

ポール J. ミランティ・ジュニア（Paul J. Miranti, Jr.）が1990年に上梓した *Accountancy Comes of Age* は「この国の経済生活においてこのプロフェッションに恒久的にして重要な役割を担わせるためにアメリカ公共会計士協会（American Association of Public Accountants）およびその後継団体のアメリカ会計士協会（American Institute of Accountants）が採った方策に焦点を合わせている[51]」とされ，「この新しいプロフェッションのリーダーたちは彼らの職を全国的な規模で組織化しようとした際に二つの難題に直面した。一つ目は，業務やクライアントや社会的背景の違いによって分裂することが少なくない会計士業界の結束の強化，という内部的な問題であり，二つ目は，このプロフェッション特有の技倆が流動的な社会の整序に役立つということを影響力の大きい実業界や政府のリーダーたちに納得させなければならない，という問題であった[52]」として，会計士団体の「成功は，したがってまた，さまざまな特徴的な要素が混在する会計士業界においてそのリーダーたちが合意を形成し，結束を維持することができるか，という彼らの力量に懸かっており，これはクライアントや一般大衆にこのプロフェッションについて，威信のあるプロフェッション，というイメージを植えつけるためにも，あるいはまた，当局とうまくやってゆくのに必要な政治的な力を得るためにも重要であった[53]」としている。

デレク・マシューズ（Derek Matthews），マルコム・アンダーソン（Malcolm Anderson），およびジョン・リチャード・エドワーズ（John Richard Edwards）の1998年刊の *The Priesthood of Industry* は「今日，イギリスの先導的な会計士団体は250,000人超のメンバーを誇り，また，企業の経営陣に名を列ねる会計士は増加の一途を辿っており，事実，会計士たちはイギリスの企業経営において最も有力なプロフェッショナルとなるにいたっている[54]」として「彼らは自身の職を経営上の卓越した資格として確立することに大いに成功してきているが，これは多くの他の国々においてはみられないことであり，イギリスにおいても常にそうであったわけではない[55]」とする認識の下，「主要都市の職業別人名録に少数の会計士の名が記載されていた18世紀末から，営利主義的な巨大な事務所が存在する20世紀末にいたるまで，会計プロフェッションの発展について実証的に述べて[56]」おり，また，とりわけ「公共会計士業から企業に身を転じたプロフェッショナル会計士の動向に重点を置いて[57]」いる。

ケン・シャクルトン（Ken Shackleton）とスティーブン P. ウォーカー（Stephen P. Walker）の1998年刊の *Professional Reconstruction* は，T. A. リーが執筆した序文によれば，「1930年から1957

50） *Ibid.*, p. xiii.

51） Paul J. Miranti, Jr., *Accountancy Comes of Age: The Development of an American Profession, 1886–1940*, 1990, flap.

52） *Ibid.*, flap.

53） *Ibid.*, p. x.

54） Derek Matthews, Malcolm Anderson, and John Richard Edwards, *The Priesthood of Industry: The Rise of the Professional Accountant in British Management*, 1998, flap.

55） *Ibid.*, p. v.

56） *Ibid.*, flap.

57） *Ibid.*, p. vii.

年までの間におけるイギリスの主要な会計士団体の連係の試みを扱って[58]」おり，「1988年のイギリス勅許会計士協会（British Institute of Chartered Accountants in England and Wales）の創設の失敗を体験し，また，プロフェッショナリゼーションの歴史研究を手掛けたことがある筆者は連係委員会をめぐる出来事やこの委員会の活動に通じているが，これをケン・シャクルトンとスティーブ・ウォーカーは実に見事に叙述している[59]」とされている。そうした本書の概説によれば，「イギリスの会計プロフェッションの際立った特徴の一つは比較的多数の団体によって代表されていることである。……多くの国々において公共会計士業は登録制度をもって国に規制されているが，イギリスの会計士団体はそうした特権を手に入れることができずに，あるいはまた，手に入れることを欲しないできている。勅許は完全な独占を確保する手段を与えるものではないとはいえ，いくつかの団体は勅許を得ることによって他者の参入をうまく妨げてきている。登録制度の導入の失敗が直接的にもたらしたことはイギリスにおける会計士団体の急増であった。先駆的な勅許団体が権利を主張する公共会計士業に参入するために新団体が設立され，また，原価計算や公会計といった特殊な会計にかかわる会計士のためにもいくつかの団体が設けられ……1930年までには少なくとも17の会計士団体がイギリスに存在するという状況にいたって[60]」おり，その後，「会計プロフェッションは「秩序を取り戻す」べき[61]」という声の高まりを受けて「イングランド＆ウェールズ勅許会計士協会，のちにスコットランド勅許会計士協会を結成するスコットランドの三つの勅許団体，法人会計士・監査人協会（Society of Incorporated Accountants and Auditors），認可会計士・法人会計士協会（Association of Certified and Corporated Accountants），およびあとから加わったアイルランド勅許会計士協会による団体間のフォーラム[62]」として設けられた連係委員会は，ただし，「唯一の会計士団体の設立を提案するのではなく，法をもってする登録制度の下，会計プロフェッションが一つになるという途を選んだ[63]」が，結局，「このプロフェッションにおける連係計画は1950年代の初頭に断念された[64]」とされ，本書は「プロフェッショナル団体による連係の失敗にはいくつかの原因があったことを明らかにしている[65]」。なお，再びリーの序文によれば，「著者たちは，一つになるということは，21世紀以降も，イギリスのプロフェッショナル会計士の関心事であり続ける，としており，この問題が消え去るということはないであろう[66]」。

既出のデレク・マシューズとジム・ピリエ（Jim Pirie）の2001年刊の *The Auditors Talk* は「会計プロフェッションの広範なメンバーに対するインタビューをもって構成される口述史[67]」であり，著者たちは「本書の68のインタビューにおける証言により，変化と多様化の進行によって特

58）Ken Shackleton and Stephen P. Walker, *Professional Reconstruction: The Co-Ordination of the Accountancy Bodies 1930–1957*, 1998, p. i.
59）*Ibid.*, p. i.
60）*Ibid.*, p. v.
61）*Ibid.*, p. v.
62）*Ibid.*, pp. v–vi.
63）*Ibid.*, p. vi.
64）*Ibid.*, p. v.
65）*Ibid.*, p. v.
66）*Ibid.*, p. i.

徴づけられる1920年代から今日にいたるまでの時代における監査プロフェッションの歴史が明らかにされた[68]」としているが，著者たちのカーディフ・ビジネススクール（カーディフ大学）における同僚による書評は「いずれのインタビューも興味深いというには程遠く，古き良き時代を懐かしむ年配者たちのありきたりの愚痴でしかなく，彼らは現在，彼らの後輩たちが直面している困難がかつて彼らが直面した困難よりも大きなものであるということを不承々々認めつつ古き良き時代を懐しんでいる。報酬，サンプリング，独立性，不正，棚卸しの立ち会い，および訴訟などといった専門的な問題にかかわる彼らの貢献はおよそ大したことがなく，なかには名誉棄損で訴えられかねないものもある[69]」と実に厳しく，「私は口述史を記録することには意義を認めており，本書の場合も，監査人たちに話させることに異議はないが，しかし，「いったい誰が聴くのだろう？」と訝しく思う[70]」と結んでいる。

マイク・ブルースター（Mike Brewster）の2003年刊の *Unaccountable* は「二〇〇一年後半のエンロンの崩壊以来，会計士という職業は，それまで得ていた世間からのほとんど無条件の尊敬を失ってしまった。会計士間の相互審査システムと，自主規制力が失われたのだ。会計士業界は，二〇〇二年六月，その一員であるアンダーセンが，司法妨害の有罪判決を受けて司法省により安楽死させられたのを見た[71]」として「世間の人々は，会計士の世界で明らかに何かが壊れたのを知った。面目を失った今は亡きアーサー・アンダーセンは，エンロンでのほとんどすべての責任を放棄した後，あざけるようにいくつかの新しい責任をでっち上げた。企業の修正報告書は年々増え続けている。企業は帳簿を改竄し，会計士はそれを見過ごす[72]」とする認識の下，「本書を書こうと思った理由の一つは，その多くが週に七十，八十，いや九十時間も働く誠実なプロフェッショナルでありながら，自分たちが人々の期待にどう応えればいいのかについて，あまりにも無理解なこの職業に惹かれるからだ[73]」とする著者が他方，「利益追求体質への転換で一番驚かされるのは，大きな会計事務所の会計士のほとんどが，百年前，あるいはたった三十年前と比べてみても，その職業がどんなに違ったものになってしまったかにまったく気づいていないということだ。たとえば不正行為である。今の会計士は，経営陣の不正行為を調査するのは，自分の仕事の範囲ではないと主張する[74]」が「しかし，本書を書くために私が歴史を調べてみたところでは……経営者の不正を洗い出すのは，何百年もの間，会計士の主要な仕事の一つだったのだ[75]」といった

67）Roy A. Chandler, 'Derek Matthews and Jim Pirie（2001）*The Auditors Talk. An Oral History of a Profession from the 1920s to the Present Day*, New York: Garland Publishing, pp. ix＋494. £75,' *Accounting, Business & Financial History*, Vol. 12, No. 1, 2002, p. 135.

68）Derek Matthews and Jim Pirie, *The Auditors Talk: An Oral History of a Profession from the 1920s to the Present Day*, 2000, p. 444.

69）Chandler, 'Derek Matthews and Jim Pirie（2001）*The Auditors Talk. An Oral History of a Profession from the 1920s to the Present Day,*' p. 137.

70）*Ibid.*, p. 137.

71）友岡賛（監訳），山内あゆ子（訳）『会計破綻――会計プロフェッションの背信』2004年，５頁。

72）同上，５頁。

73）同上，６頁。

74）同上，６～７頁。

75）同上，７頁。

点に着目し，「この職業が今後どうなっていくのかについて，私は自分なりに理解することに決めた。まずは，そもそもの始まりに帰ろう。会計の発展を理解することによって，なぜこの職業が現在のような苦境に陥ってしまったのかがはっきり理解できるはずだ。物語は，中東で生まれた最初の会計士から始まる[76]」として，紀元前8000年のトークンによる会計記録から説き起こし，古代ギリシャ，中世イタリア，そして19世紀にいたるまでのイギリスについて会計の歴史を確認し，その後，アメリカを舞台に主として会計プロフェッションの足跡を現在まで辿っている。

既に言及されたT. A. リー（T. A. Lee）の2006年刊の *Seekers of Truth* は既述の「近代公共会計士業の創始者」と題する第Ⅲ部が300頁を超えて大半を占める「伝記的な歴史[77]」であり，その「起源はかつてリチャード・ブラウンという名のスコットランドの勅許会計士によっておこなわれた研究にある。組織化された公共会計士業の近代史はブラウンの生年の３年前に始まり，1905年にエディンバラ会計士協会が創立50周年を迎えた際に同協会の事務局長を務めていた彼はこの周年を記念して会計史を執筆し，それに初期のスコットランドの会計士たちの略伝を収めた[78]」とされ，この *Seekers of Truth* も「その執筆時期にスコットランド勅許会計士協会が創立150周年を迎えた2004年を含んでいる[79]」とされる。かくして既述のように計138名の略伝を示した本書はその後，「エディンバラ会計士協会とグラスゴー会計士・保険数理士協会の設立は本質的にはスコットランドの公共会計士業における組織化されたエリートの創出であった[80]」としつつ，また，この設立の「社会的な目的は信頼しうる会計士業に関して公益を守ることであり，別言すれば，例えば破産関係業務のような業務の従事者を勅許団体のメンバーに限ることが公益に繋がると考えられていた[81]」とし，「この両市における設立は成功を収め，今日，スコットランド勅許会計士協会は15,000名超の会員を擁する公共会計士団体として依然，国際的に信望を得ている[82]」と結んでいる。

叙上のリーはリバプール大学，エディンバラ大学，アラバマ大学にて教授職を務め，また，会計史家協会の会長を務めたこともある会計学者であり[83]，その彼がこれも2006年に上梓した *The Development of American Public Accountancy Profession* は「そのメンバーが，スコットランドの会計士業のみならず，世界中の多くの国々の会計士業にも影響を与えたプロフェッショナル会計士団体の創立150周年を記念している[84]」とされ，「アメリカに移住し，そこで1875年から1914年までの間にキャリアを築いていった161名のエディンバラ会計士協会，グラスゴー会計士・保険数理士協会，およびアバディーン会計士協会の会員[85]」の略伝を示し，「また，1914年以前に無資格会

76）　同上，28頁。
77）　Lee, *Seekers of Truth*, p. xiii.
78）　*Ibid.*, p. xiii.
79）　*Ibid.*, p. xiii.
80）　*Ibid.*, p. 366.
81）　*Ibid.*, p. 366.
82）　*Ibid.*, p. 366.
83）　現在はアラバマ大学とセントアンドルーズ大学の名誉教授。
84）　T. A. Lee, *The Development of American Public Accountancy Profession: Scottish Chartered Accountants and the Early American Public Accountancy Profession*, 2006, p. x.
85）　*Ibid.*, p. x.

計士としてアメリカに移住したスコットランドの会計士のうち，関係史料が存在する16名についてもその生涯を分析して[86]」おり，「この無資格者のなかには，例えばアーサー・ヤング＆カンパニーの創設者アーサー・ヤングやマーウィック，ミッチェル＆カンパニーの共同創設者の一人シンプソン・ロジャー・ミッチェルが含まれている[87]」。そうした「本書は，会計士業に対する需要がアメリカ生まれの会計士によるその供給力を遙かに上回っていた時期にアメリカの公共会計士業の成立と発展を助けた比較的少数のスコットランド人たちの努力を称えて[88]」おり，「アメリカの公共会計士業に対する彼らの影響は彼らの人数とは不釣り合いに大きかった[89]」としている。

既出のデレク・マシューズが2006年に上梓した *A History of Auditing* は「初めて監査人たちの仕事を明らかにし，また，彼らがいかにして現況にいたったのかを詳述している[90]」とされ，「過去および現在の監査人を対象とした郵送アンケートと口述史[91]」に依拠していることを特徴としている。そうした本書は「監査は明らかに今日の会計士業において最も議論の的になるものである[92]」という認識の下，監査をめぐるスキャンダルは後を絶たず，他方，19世紀末以降の会計プロフェッションの繁栄は監査業務の発展に大きく負うていたにもかかわらず，「会計史家たちが監査にはほとんど注目してこなかったこと……は驚くべきことである[93]」とし，また，例えば1988年に「リーは「監査の歴史は研究テーマとしてほとんど注目されてきていない[94]」と指摘しているが，「爾来，大きな変化はみられない」としており，「監査手続きに歴史家たちが関心を示さない理由は推測することしかできないが，恐らくは……「監査人が実際にどのように監査をおこなっているのかについては極めて僅かな情報しかなかった」ということが主たる理由である[95]」とした上で，「公刊物が乏しく，事実を裏づける記録が明らかに足りないことに鑑みて，イングランド＆ウェールズ勅許会計士協会からの寛大な資金提供をもって可能となった口述史とアンケートを共に用いた監査史に関するプロジェクトを立ち上げることとなった[96]」としている。

ポール M. クリックマン（Paul M. Clikeman）の2009年刊の *Called to Account* は「アメリカの公共会計プロフェッションに重要な影響を与えた14の会計スキャンダルについて叙述している[97]」。すなわち，本書は「歴史を通じて，一握りの会計士と監査人が金融犯罪との戦いに勝利したことをもって称賛されている[98]」が，「しかし，20世紀を通じて，アメリカの公共会計士たちは彼らの

86） *Ibid.*, p. x.
87） *Ibid.*, p. x.
88） *Ibid.*, p. i.
89） *Ibid.*, p. i.
90） Derek Matthews, *A History of Auditing: The Changing Audit Process in Britain from the Nineteenth Century to the Present Day*, 2006, p. i.
91） *Ibid.*, p. i.
92） *Ibid.*, p. 1.
93） *Ibid.*, p. 1.
94） *Ibid.*, p. 1.
95） *Ibid.*, pp. 2–3.
96） *Ibid.*, p. 3.
97） Paul M. Clikeman, *Called to Account: Fourteen Financial Frauds That Shaped the American Accounting Profession*, 2009, p. 2.
98） *Ibid.*, p. 2.

クライアントによる多くの大胆不敵な不正を発見することができなかった。……それぞれのスキャンダルのあとには「会計士はどこにいたんだ？」という怒りの声がやってきた[99]」として「監査人たちはしばしば否定と弁解をもって応答したにもかかわらず，これらのスキャンダルの多くは結局は監査手続きと財務報告実践における重要な改善に繋がった。……これらのスキャンダルの多くは会計士と監査人が現行のプロフェッショナル基準に違反したことから生じ，その他のスキャンダルは当時の基準の欠点を明らかにした[100]」としており，「確かに不正は公共会計プロフェッションの進歩における唯一の原因ではない。……しかし，変化はしばしば困難であって，特に「保守的な」会計士にとっては骨が折れることである。会計士が欠点を認め，改めようとするためには，広く公になった会計スキャンダルがしばしば必要であった。怒った有権者が改革を求めないかぎり，会計に大きな関心を寄せる政治家はほとんどいない[101]」としている。

歴史の意義

前に引いた「初期の会計史文献には，その多くで会計とそれに携わる専門職業人の社会的地位の向上という役割が期待されていた。会計が，古くから営まれてきた長い歴史を持つものであることを強調することにより，会計専門職業の存在意義，あるいは，学問としての会計学の正統性を示そうとしたのである」は「しかし，会計の役割に対する社会的期待が相当確立した現在において，会計の地位向上のような目的は必要とされないであろう[102]」と続く。

しかしながら，会計士の地位の向上が十分に果たされたかどうかはさておくとしても，歴史の意義は（少なくとも「歴史に学ぶこと」の意義は）事物の存在意義を知ることにあろう。

「存在するものにはすべて意味があり，存在にはすべて理由がある。そして，その意味は歴史のなかにある。或るものの存在理由はその歴史のなかにあり，すなわち，われわれは或るものの意義をその歴史のなかに知ることができる。歴史に学ぶとはそうしたことだろう[103]」。

それにしても，どうして歴史は，その意義について，いちいち言い訳しなければならないのだろうか。

しかも，「専門分野としての形成期から実務主導型の性格を色濃く有している「会計」において，「会計の歴史を学ぶことが会計人にとって何の役に立つのか」という問いに答えることは，歴史研究一般よりもなお一層困難である[104]」ともされる。

歴史の意義については別稿の予定もあるが，知ることの喜びをもたらす，というだけでは足りないのだろうか。

99）　*Ibid.*, p. 2.
100）　*Ibid.*, p. 2.
101）　*Ibid.*, p. 2.
102）　清水「現代会計へのプロローグ」276頁。
103）　友岡賛『会計学原理』2012年，223頁。
104）　中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』2014年，(1)頁。

文　献

Abbott, Andrew, *The System of Professions: An Essay on the Division of Expert Labor*, University of Chicago Press, 1988.

Allen, David Grayson and McDermott, Kathleen, *Accounting for Success: A History of Price Waterhouse in America 1890–1990*, Harvard Business School Press, 1993.

Armstrong, Mary Beth, *Ethics and Professionalism for CPAs*, South-Western Publishing, 1993.

Banyard, Cyril W., *The Institute of Cost and Management Accountants: A History*, CIMA Publishing, 1985.

C. W. バンヤード（Cyril W. Banyard）／鈴木一道（訳）『イギリス管理会計士勅許協会の発展』大東文化大学経営研究所，1989年。

Brewster, Mike, *Unaccountable: How the Accounting Profession Forfeited a Public Trust*, John Wiley & Sons, 2003.

マイク・ブルースター（Mike Brewster）／友岡賛（監訳），山内あゆ子（訳）『会計破綻――会計プロフェッションの背信』税務経理協会，2004年。

Brown, Richard（ed.）, *A History of Accounting and Accountants*, T. C. & E. C. Jack, 1905.

Buckley, John W. and Buckley, Marlene H., *The Accounting Profession*, Melville Publishing, 1974.

Carey, John L., *The Rise of the Accounting Profession: From Technician to Professional, 1896–1936*, American Institute of Certified Public Accountants, 1969.

Carey, John L., *The Rise of the Accounting Profession: To Responsibility and Authority, 1937–1969*, American Institute of Certified Public Accountants, 1970.

Carr-Saunders, A. M. and Wilson, P. A., *The Professions*, Oxford University Press, 1933.

Chandler, Roy A., 'Derek Matthews and Jim Pirie（2001）*The Auditors Talk. An Oral History of a Profession from the 1920s to the Present Day*, New York: Garland Publishing, pp. ix ＋494. £75,' *Accounting, Business & Financial History*, Vol. 12, No. 1, 2002.

Clikeman, Paul M., *Called to Account: Fourteen Financial Frauds That Shaped the American Accounting Profession*, Routledge, 2009.

Green, Wilmer L., *History and Survey of Accountancy*, Standard Text Press, 1930.

Edwards, James Don, *History of Public Accounting in the United States*, Bureau of Business and Economic Research, Graduate School of Business Administration, Michigan State University, 1960.

Edwards, James Don, *History of Public Accounting in the United States*, paperback ed., University of Alabama Press, 1978.

Elliott, Philip, *The Sociology of the Professions*, Macmillan, 1972.

Habgood, Wendy（ed.）, *Chartered Accountants in England and Wales: A Guide to Historical Records*, Manchester University Press, 1994.

Hanlon, Gerard, *The Commercialisation of Accountancy: Flexible Accumulation and the Transformation of the Service Class*, St. Martin's Press, 1994.

Howitt, Harold, *The History of the Institute of Chartered Accountants in England and Wales 1880–1965 and of Its Founder Accountancy Bodies 1870–1880: The Growth of a Profession and Its Influence on Legislation and Public Affairs*, Heinemann, 1966.

Institute of Chartered Accountants of Scotland, *A History of the Chartered Accountants of Scotland: From the Earliest Times to 1954*, Institute of Chartered Accountants of Scotland, 1954.

Johnson, Terence J., *Professions and Power*, Macmillan, 1972.

Jones, Edgar, *Accountancy and the British Economy 1840–1980: The Evolution of Ernst & Whinney*, B. T. Batsford, 1981.

Jones, Edgar, *True and Fair: A History of Price Waterhouse*, Hamish Hamilton, 1995.

Kedslie, Moyra J. M., *Firm Foundations: The Development of Professional Accounting in Scotland*, Hull University Press, 1990.

Larson, Magali Sarfatti, *The Rise of Professionalism: A Sociological Analysis*, University of California Press, 1977.

Lee, T. A., *The Development of American Public Accountancy Profession: Scottish Chartered Accountants and the Early American Public Accountancy Profession*, Routledge, 2006.

Lee, T. A., *Seekers of Truth: The Scottish Founders of Modern Public Accountancy*, Elsevier JAI, 2006.

McClelland, James, *The Origin and Present Organization of the Profession of Chartered Accountants in Scotland*, J. MacLehose, 1869.

Macdonald, Keith M., *The Sociology of the Professions*, Sage Publications, 1995.
Matthews, Derek, *A History of Auditing: The Changing Audit Process in Britain from the Nineteenth Century to the Present Day*, Routledge, 2006.
Matthews, Derek, Anderson, Malcolm, and Edwards, John Richard, *The Priesthood of Industry: The Rise of the Professional Accountant in British Management*, Oxford University Press, 1998.
Matthews, Derek and Pirie, Jim, *The Auditors Talk: An Oral History of a Profession from the 1920s to the Present Day*, Garland Publishing, 2001.
Millerson, Geoffrey, *The Qualifying Associations: A Study in Professionalization*, Routledge & Kegan Paul, 1964.
Miranti, Paul J., Jr., *Accountancy Comes of Age: The Development of an American Profession, 1886–1940*, University of North Carolina Press, 1990.
Most, Kenneth S., *The Future of the Accounting Profession: A Global Perspective*, Quorum Books, 1993.
中村忠「ニコラス・ステイシイ著『英國会計史』Nicholas A. H. Stacey: English Accountancy 1800–1954, A Study in Social and Economic History, pp. xvii ＋295, London, 1954」『一橋論叢』第36巻第１号，1956年。
中野常男「「会計」の起源とわが国における会計史研究の展開と課題」千葉準一，中野常男（責任編集）『体系現代会計学［第８巻］会計と会計学の歴史』中央経済社，2012年。
中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』同文舘出版，2014年。
Parker, R. H., *The Development of the Accountancy Profession in Britain to the Early Twentieth Century*, Academy of Accounting Historians, 1986.
R. H. パーカー（R. H. Parker）／友岡賛，小林麻衣子（訳）『会計士の歴史』慶應義塾大学出版会，2006年。
Perks, R. W., *Accounting and Society*, Chapman & Hall, 1993.
Robinson, H. W., *A History of Accountants in Ireland*, Institute of Chartered Accountants in Ireland, 1964.
Robinson, H. W., *A History of Accountants in Ireland*, 2nd ed., Institute of Chartered Accountants in Ireland, 1983.
Roslender, Robin, *Sociological Perspectives on Modern Accountancy*, Routledge, 1992.
ロビン・ロスレンダー（Robin Roslender）／加藤吉則，杉原周樹（訳）『会計と社会――現代会計制度に関する社会学的諸観点からの考察』同友館，1995年。
Shackleton, Ken and Walker, Stephen P., *Professional Reconstruction: The Co-Ordination of the Accountancy Bodies 1930–1957*, Institute of Chartered Accountants of Scotland, 1998.
清水泰洋「現代会計へのプロローグ」中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』同文舘出版，2014年。
Stacey, Nicholas A. H., *English Accountancy 1800–1954: A Study in Social and Economic History*, Gee, 1954.
Stewart, Jas. C., *Pioneers of a Profession: Chartered Accountants to 1879*, Scottish Committee on Accounting History, Institute of Chartered Accountants of Scotland, 1977.
友岡賛『会計学原理』税務経理協会，2012年。
友岡賛「会計通史の展開」『三田商学研究』第58巻第３号，2015年。
West, Brian P., *Professionalism and Accounting Rules*, Routledge, 2003.
Wilcox, Edward B., 'James Don Edwards, *History of Public Accounting in the United States* (East Lansing: Bureau of Business and Economic Research, Michigan State University, 1960, pp. xiv, 368, ＄6.50),' *The Accounting Review*, Vol. 36, No. 3, 1961.
Woolf, Arthur H., *A Short History of Accountants and Accountancy*, Gee, 1912.
ウルフ（Arthur H. Woolf）／片岡義雄，片岡泰彦（訳）『ウルフ会計史』法政大学出版局，1977年。
Worthington, Beresford, *Professional Accountants: An Historical Sketch*, Gee, 1895.

2015年７月１日成稿